

異文化間交流

——「文化や習慣の違い」を乗り越えること——

西 本 恵 司

(受付 2007年10月2日)

I. はじめに

1. 「文化や習慣の違い」を主張しようとする時

来日間もない留学生のように、まだ日本の社会や日本人との人間関係に
適応できないでいるときには、「どうしてそうするのか」「なぜあんなこと
を言うのか」など、人々のある行為や言い方が全く理解できなかつたり、
納得できないことが多くある。そのような場合、彼らは「文化や習慣が違
う」から、わかりあえない、などという。

「文化や習慣が違う」ことが、お互いに理解できないことの原因や理由と
してあげられる。しかし、言葉の習得が進み、多くの人との接触が増え、
さまざまな人や事柄の経験が増え、その社会に対する理解が進むにつれて、
確かに「文化や習慣の違い」があることは事実としても、それが交流や接
触の際の相互理解の最も主要な障害になるという考えは影をひそめて、そ
の時々事情や個人的な特殊な理由が障害の原因とみなされるようになる。

2. 「文化や習慣が違う」ということを、意識することはまれである

「外国人は文化や習慣が違う」ということはよくわかっているようであ
るが、しかし、その知識もいろいろな経験によって身についたものではな
いと、うまく機能しないのではないだろうか。

私たちは、外国人についてその人は文化や習慣が違うということを、あ
まり意識せず接しているのではないか。次のような事例について、見て
みよう。

まず、韓国の交換留学生の作文である¹⁾。

見た目だけで、たぶん日本のことは全部わかっているに違いないということを前提して、私に話しかけてくる人がいます。日本の学生はちゃんと説明しなくても、「きっとわかっているんだろう」と思うようです。今まで違う環境で育てられて、人と人の出会いにはお互いに「よくわかっていない」のが一般的だと思います。よくわかった上で「あやまち、間違い」をするのと、わからなくてするのは、次元が違います。もっと対話し説明しようとする考えを持ってほしいです。

私たちは、特に東アジアの人に対して、「見た目だけで、たぶん日本のことは全部わかっているにちがいない」という態度で接するようだ。

次は、東京都のある区役所で公報の仕事をしているフランス人ウゲットさんが経験したことである (ムハンマド・ズベル, 1999: 222-223)。

職場の昼休みの時間にウゲットさんは屋外に出て、リングを丸ごとかじっていた。それをたまたま見ていた職場の同僚である日本人の男性が、「そんな行儀悪いこと、女性がするものではない」と、昼休みが終わって職場に戻った彼女をしかったそうだ。そのとき、ウゲットさんは猛然と抗議したという。フランスでは日常的な行為が、日本では行儀が悪いと抗議される。国際化を推し進めるために、この職場で働いているはずなのに、日本人のように振る舞うように強要されるのは、おかしいではないか……。

職場の同僚はウゲットさんの行動について、それが日本ではどのように見られるかを教えようとしていたとも考えられるのだが、それを「行儀が悪い」と判断して注意した。相手の行動については、それがこちらの側(自分たち)にとってどんなことかは見えやすい。それは、相手の行動への批判や非難になったり、怒りなどの感情となって現われるからである。

1) 2004年度韓国啓明大学交換留学生 林君の文章より

その反面、相手が何を求め何をしようとしているのかについては、そうした批判などに隠れて見えないことが多い。人はいつも相手の行動を判断したり、評価したりしているが、判断したり評価したりしているその時に、相手はそのことをどのように思っているのだろうか、という観点は普通持たない。そしてまた、相手がそのことについて行なっている判断や評価が、その人の属する文化や習慣に大きく左右されていることもほとんど意識してはいない。

「文化や習慣が違う」人の振る舞いをそれとして認めることができるためには、このような普段あまり意識されていないことを、あえて意識できる、あるいはあえて意識してそのような観点を想定してみることができる、ということが必要なのではないかと、つまり、何かある判断を下そうとする時に、あっそうだ、この人は「文化や習慣が違う」人だと、そういうことを考えてみる必要があるのではないかと思われる。

3. 本論の課題

ここでは、異文化を異文化として認める経験を振り返ってみることによって、「文化や習慣が違う」人の振る舞いをそれとして認めるとはどのようなことか、そしてそれはどのようにすれば身につくのか、また、この「違い」を乗り越えるとはどのようなことか、そしてそれはどのようにして可能なのか、というについて、いくつかの事例をもとに、考察したい。

まず、次のⅡ節では事例1によつて、「文化や習慣が違う」人の振る舞いを見つめ、それを評価する視点の持つ問題点について考察し、「違い」を考える場合に、相手を「善意の一般人」とであると想定することの必要性について考えたい。

次に、Ⅲ節では事例2によつて、この「違い」を乗り越えることについて考察したい。そのために「共通の関心」「共通に目指していること」を意識することの必要性について述べたい。

最後に、IV節では、すでに社会に適応している「文化や習慣の違う」人が、適応していることをその人自身はどのようなことと考えているのか。また、それをベリー (Berry, J. W.) の「統合 (integratin)」という概念 (Berry, 1990: 224-225) を用いて、自己のアイデンティティについて考察し、あわせて、このような人と交流・接触する人の心構えについて考察したい。

II. 「違い」の発現とその解釈をめぐって

次の事例は、中国における日本人留学生の振る舞いについて書かれている。この事例にそって考察したい。

事例 1

ある日本人の留学生がホテル代を節約するため、知り合いを通じて中国人学生の宿舎に泊まることになった。かれが3日間宿泊する間、同室の中国人がご飯をごちそうし、観光案内をしてくれたが、かれは一銭も負担しなかった。またかれは喉が渇いて飲み物を買うとき、いつも自分の分だけを買ひ、同行した中国人学生にたずねることもなかった。みなは、かれがたいへん利己的で失礼だと思い、かれが発発するときにはだれもかれを見送らなかった。

(陸慶和, 2001: 136)

小見出し 「食べ物を勧める文化」

1. この文章を読んでの反応は

この文章を、中国人留学生が読むと、本文にあるとおり、「この日本人はなんとひどい、失礼だよ」と思う。日本人学生が読むと、「なにかひどい、こんなはずはない」と思う。

中国人留学生がそのように思う理由は、中国人学生が示した好意に対して、日本人留学生がそれに報いようとしていないと判断するからである。中国人留学生としては、受けた好意や礼に対しては、当然のことながら礼

をもってお返しすることがなければならない、と考えるからである。そのような振る舞いがみられないと、よほどひどい人間だとみなされることになる。

それに対して日本人学生は、次のように思うだろう。この文章では日本人留学生は、中国人学生の好意をいいことに、ホテル代のみならず食事代や見物の費用を節約しようとしている自分勝手に虫がよすぎる人物として描かれている。

確かにそのような人間がいないわけではないけど、そのような人間をもって「日本人はこのようだ」と言われると、それはちょっと違うんじゃないのと言いたくなるだろう。

この文章の主旨は、日本人留学生を批判することにあるのではなく、「食べ物（飲み物も含めて）を勧める文化」がない日本人は中国でどのように見られるか、ということにあるのだが、先に見たように、日本人学生にしる、中国人留学生にしる、ともにこの文章は日本人留学生を批判していると思うのは、どうしてであろうか。

それは、この文章の書き方の問題として指摘できる。この文章は両国の文化や習慣の違いをそれぞれの視点から述べようとするのではなくて、一方の側の文化や価値観によって、そのような文化や習慣を持たない他方の側を判定するという書き方になっているからである。しかも、大変残念なことではあるが、これを読む人たちがこうした異文化間の接触において、知らず知らずのうちに期待するさまざまな事柄、例えば、楽しく交流したいという願いや、お互いを理解しうまくやりたいという気持ちや感情などには、まったく関心が払われていないことも、そうした一方的な批判の印象を強めているのではないだろうか。

それから、もう一つ指摘できることは、文化比較を行なうときに陥りがちなことではあるのだが、どうしても都合のいい自分の視点から観察し表現することである。この文章にもそれが表れている。

ところで、では文化比較において、一方的な叙述にならないようにする

ためには、どのようなことが必要であろうか。

それは、自分の側については都合よくなりがちであることを十分注意した上で、他方の当事者が「善意の一般人」であることを、しっかりと踏まえた叙述を行なうことではないだろうか。

2. 当事者は「善意の一般人」

このような異文化の交流を語ることににおいては、当事者は当然のことながら私でもありあなたでもありうるそのような当事者であり、しかもそれは「善意」の当事者でなくてはならない。そうではなく、「それはちょっとおかしいよ、その人が特別なんじゃない」と思わせる「当事者」では、異文化間の交流そのものを主題とすることができなくなるのではないか。

例えば、上記の事例 1 について言えば、ここで語られているのは、まったく考えられないことではないが、中国人学生の好意に甘えて、なるべく出費を押さえることができたとして、得をしたと思っている日本人留学生のことだとも考えられる。

そして、このような場合もありうるであろう。その場合にこそ「利己的で失礼」だという批判も当てはまる。このような場合には、あえて何かを弁護することはないし、この話題をめぐって話し合うこともないだろう。もしこのような留学生が当事者なのであれば、それはちょっと違うよ、もし私だったらもっと違う行動があるはずだということになる。そして、そういう行動こそ、異文化間の交流において議論する意義のある話題になるのであり、また、話題にする必要があることだと言えよう。

このことは、私たちがここで扱おうとしている一人一人が、善意の普通人であることを前提としていることを改めて知らせてくれる。もし、少しでも何らかの「悪意」を仮定することがあれば、異文化交流でのさまざまな議論はまるで意味を持たなくなる。

そして残念なことだが、そういう人間の存在をまったく否定することはできないし、それがもたらす問題もまた、別の形で存在している。が、こ

ここではそれらに直接言及することはしない。しかし、それがもたらす影響も、善意の普通人どうしの交流によって、補なわれることを期待したい。

3. 当事者を「善意の一般人」とみなすこととは

この事例1の文章には、当事者を「善意の一般人」とする視点がない。それがないので、一方の当事者に、ほんのわずかではあるが、何らかの「悪意」すら感じさせることになっている。

さて、両当事者がともに「善意の一般人」であるとは、どういうことであろうか。一方は、外国から来た留学生に親切に好意をもって接しようとする、中国人学生である。それに対するのは、その好意や親切を「ありがたい」と感じる人間でなくてはならないだろう。事例1ではその点が定かでないが故に、これを読んだ日本人学生に何か違和感を抱かせることになっている。

「善意の一般人」としての日本人留学生は、この文章にあるように、中国人の学生から、好意を受けると、感謝の気持ちを抱くのが自然であり、お礼の気持ちを表現することを考えるのが普通である。

確かに、実際見られた姿としては、次のようなことがありうるだろう。つまり明らかにそのような意識を持って接しているかどうか、あるいは、そのための行動を思い描いているかどうか、という点では、そうではないこともありうるし、まったくそのために何をしたらいいのかわからないこともありうる。その結果ただただ好意に甘えてしまっていることもありうる。つまり、外見的には、この事例の文章に表現されているとおりに、好意にこたえた行動を何もしないままであることがありうる。それは、実際に陸氏が描いているとおりであったのだろう。

実際にそうであったとしても、あるいはそうでありうるが故にと言った方が適切であるかもしれないのだが、なおさら、相手を「善意の一般人」とみなす視点はずすことはできない。(そうでなければ、一方的な批判になってしまう)

4. そもそもこのことの起こりを考えることは、共通の視点を持つこと

ところで、事例 1 は、出来事としては異文化間の交流であり接触である。そして、この交流や接触は「うまくいかなかった」事例であり、おそらく双方に不満が残るものであったであろう。

その不満は、それぞれの期待が満たされなかったことによると言えよう。そして、このそれぞれが抱いていた期待こそ、この事例 1 の根底にあるそもそもこのことの起こりに他ならない。

この「このことの起こり」は、前の 3. で述べたようにお互いを「善意の一般人」と想定すればこそ得られる視点である。

一方の当事者は、外国から来た留学生に親切に好意をもって接しようとする、中国人学生である。それに対する当事者は、その好意や親切を「ありがたい」と感じる日本人留学生である。

中国人学生は、自分たちの好意に見合う感謝を期待したが、日本人留学生の行為（「いつも自分の飲み物だけ買う」ことなど）に好意が裏切られたと感じた。他方、日本人留学生は感謝の気持ちは伝わっているはずだと考えていたのに、あるいは少なくとも中国人学生の好意を損なうことはしていないと思っていたのに、彼らの行為（見送りをしなかったこと）を意外と感じ失望を感じたことだろう。

どうしてそのようなようになったのが、この事例 1 のテーマでなければならぬ。そして、どうしてそうなったのかを議論する出発点として、共通の関心、共通を目指していたことを確認しておくことが大切である。

それは、お互いの交流において、相手を大事にすること、そしてそれに対して感謝することである。これに異議を唱える人はいないであろう。これが議論の出発点である。しかもこうした共通の関心と理解の確認は、これこそ当事者が「善意の一般人」であることを前提にしているのである。これは大変大切なことである。

このような共通の関心と理解までたどり、そこから出発すれば、事例 1 の一連の出来事の「このことの起こり」を解きほぐすことができる。

お互いに了解できる考えはあるのだが、それを実際に行なう仕方、実現の仕方が違うこと、「いい」と評価する視点が異なることなどの具体的な違いがそこから明らかになるだろう。

5. 日本人学生は中国人学生の好意や親切をどのように考えるだろう

外見上は、好意にこたえる行動を何もしなかった、日本人留学生ではあるが、「善意の一般人」であれば、彼がどのように考え感じ判断したのかについて、いろいろ想像することができる。

日本人学生は、日本人留学生の行動（中国人の学生がごちそうしてくれたり、観光案内してくれたとき料金を負担しなかったこと、自分だけ飲み物を買ったこと）を、次のように説明することができるだろう。

中国人の学生が、観光案内をしたり、食事につれていったりしたのは、自分（たち）が歓迎し、もてなそうと考えたからだ。

そしてもし、反対に、中国の留学生が日本で日本人学生の宿舎に泊まることになったら、おそらく日本人の学生は、色々な所に案内したり、食事を一緒にしたりするだろう。そして、その費用はおそらく自分で負担するだろう。もし、案内のバス料金や電車料金が高い場合は、その分の自己負担を求めることがあるかもしれないが、できるだけ自分で負担しようとするだろう。

日本人留学生はそのようなことから連想して、食事や案内の料金を負担しなかったとも思われる。

あるいは、日本人留学生は、割り勘の習慣から、自分の分の負担を申し出たとも考えられる。しかし、中国人学生にはその習慣がないので彼らはそれを断ったとも思われる。それで結果的に、負担しないでしまった、とも言えよう。

また、「飲み物を買う」行動は、まったく個人的なことだ、と日本人留学生は考えていたことだろう。あるいは、そんなことも意識に上らないくらい当たり前前に飲み物を買ってしまったのではないか。彼には、喉の渇きは

まったく自分だけのことだったから。

6. 日本人学生は感謝の気持ちをどのように表そうとするだろう

事例 1 の日本人留学生は、感謝の気持ちを表す行動をしたようには描かれていないのだが、どのような形で感謝の気持ちを表現するだろうか、といろいろ考えることはできる。

19人の日本人の学生²⁾ にたずねてみると、次のような答えが返ってきた。

1. 帰ってからお礼の手紙を書く (3人) 中国語で書く (5人)
2. 中国人学生の宿舎で、手伝いをする (料理とか、片付けとか)
3. 後日、お菓子を送る (4人)
4. 帰ってからお礼の電話をする (2人), メールをする
5. 自分も同じことをする (おごってあげるとか)
6. 直接お礼を言う
7. 日本に来ることがあったら案内する

つまり、これらの行動は、実際には何も書かれてはいないのだが、事例 1 の日本人留学生が実際に取ることができることとして、考えていたとみることができる。

さて、これらの行動について、中国人留学生はどのような意見を持つか聞いてみた³⁾。

1, 4, 6. については、「口だけで、行動がない」という。つまり、感謝の表し方としては、伝わらないと言う。

2) 2007年度教養ゼミナール (異文化交流と理解) 01 に参加していた日本人学生である。

3) 2007年度教養ゼミナール (異文化交流と理解) 01 に参加していた中国人留学生 5人の意見である。

- 2, 5. は「行動があるから評価できる」と言う。
7. は「これもいいが、確実さが無い」と言う。
3. については、悪くはないが、感心しないという意見があった。

では、中国人留学生はどんな行動を望むか聞いてみると次のようになる。

1. 食事をみんなにごちそうする（カラオケやサウナなどもある）
2. 日本の料理を作ってくれるとうれしいかな
3. 最初に日本の伝統的なお菓子などをあげる
4. その人のやり方でいい

これと、先の日本人学生の感謝の表現に対する意見からみれば、中国人留学生は具体的な行動を期待していることがわかる。

7. 中国人学生の日本人留学生に対する評価について

事例1の文章にもどろう。ここで、中国人学生が日本人留学生を「利己的で失礼」だと思った理由はどのように述べられているだろうか。

「……が、かれは一銭も負担しなかった」とある。この一文は、食事をおごってもらったり、案内してもらっているのなら、例えば、交通費はみんなの分を負担したり、今度は日本人の留学生が食事をおごるとかする、というようなことがなかったことに対する非難として読むことができる。

中国人学生の好意を好意として受け取ったままでは、いくらそれを感謝してしようとも、それは中国人学生には伝わらない、ということであろう。そして、感謝を示し、好意を慰労するためにも、中国人の学生がそのように理解できる目に見える形での行動が必要だ、ということだろう。

「飲み物を買う」行動も、感謝を示したり、慰労の気持ちを表現するいい機会であるにもかかわらず、そして、中国人の学生からすれば絶好の機会であるとも思えるのに、同行した学生に「たずねる」こともなかった。

そういう日本人留学生の行動は、中国人学生がこれまでしてくれたことを日本人留学生は何とも思っていない、感謝もしていなければ、慰労すべきものともみなしていない、そのように受け取られた。それで、「たいへん利己的で失礼」な人間と思われてしまった、と考えられる。

8. 「善意の一般人」としての日本人留学生と陸氏の文章

ところで、この日本人留学生は、日本にいても「利己的で失礼」な人間と言えるだろうか。

日本人留学生は、まったく感謝の気持ちを抱かなかっただろうか。そして、中国人学生の好意や出費をすまないことだと考えなかったのだろうか。おそらく多くの日本人学生は、感謝の気持ちを抱き、すまないと思っただけだと言うだろう。

では、日本人留学生は、そのような気持ちを抱いたままで、一度もそして少しもそれを表現しなかったのだろうか。6. でみたように、多くの日本人学生は何らかの表現をしたに違いないと思うだろう。

ところで、陸氏の文章には、それに対する言及が一言もない。それはなぜだろうか。

まず言えることは、日本人留学生の行動に対する評価の視点が、陸氏を含む中国人にとって、何が大事で何が重視されるのかというところにあり、それ以外のことは評価の対象に入っていないからである。だからたとえ日本人留学生が感謝の気持ちを表していたとしても、陸氏の文章には全く触れられていないのである。

もう一つ言えることは、先にも少し触れたことだが、陸氏の文章の主眼は、二つの文化・習慣の衝突、あるいは齟齬を述べることにあって、そのような衝突や齟齬を乗り越えて交流することが主題になっていないからである。お互いに「文化や習慣が違う」ことを意識した上での対応や交流のあり方は、全く視野に入っていないのである。

こうしたことによって、交流の相手が「善意の一般人」ではなくなってしまっているのである。

9. 相手を「善意の一般人」と想定すること

ところでもし、お互いに「文化や習慣が違う」ことを意識していたら、どのようになっていたでしょうか。

陸氏の文章においては、中国人学生は中国人のやり方で日本人留学生に対応したと言えるし、日本人留学生は日本人のやり方で対応していたと言える。そして、お互いがお互いのやり方でしか相手を理解していなかったことは明らかだ。

もし日本人留学生が中国流のやり方でないと感謝や慰労の気持ちが伝わりにくいことを知っていれば、日本流のやり方で十分自分の気持ちが伝わっていると考えることはなかったであろう。他方、中国人の学生の方も日本人留学生には日本流のやり方があり、この学生は日本流に十分感謝の気持ちを表現しているのだと見ることができているならば、この学生が「たいへん利己的で失礼」な人間だとは思わなかったに違いない。

しかし、そもそもこのように相手方の習慣に通じていけば、最初から衝突や齟齬はないだろうし、問題にもならない。だから、お互いに「文化や習慣が違う」ことを意識するというのは、何も具体的な相手方のやり方を知っている、ということではない。そうではなくて、それは、相手は相手流のやり方でこたえていることを信頼することに他ならないだろう。

先に6.で、中国人留学生はどのような行動を望むか、とたずねた中で「その人のやり方でいい」という意見があったのを思い起こそう。「外国人なんだから」その人のやり方でいいのだ、というのである。

相手が外国人である場合、その考えや気持ちを推し量ることはなかなかむずかしい。そのとき相手を「善意の一般人」とであるとみなすことは、相手を信頼するよう促すに違いない。それは相手を誤解し、自分の価値観や感情から相手を判定することを思い止まらせる力があるだろう。そして、

事例 1 のような衝突や齟齬の現況から一歩抜け出すことを可能にするだろう。陸氏の文章にはこの点の考察が欠けていると言えるのではないだろうか。

そうは言っても、それができるためには、自分たちのやり方を相対化することができていなければならない。それは一方で、自分たちの価値観に合わないものを価値として認めることであり、自分たち流の意味づけにはないやり方を認めることができないなければならない。しかし、自分たちの価値観に合わないものに一定の価値を認めることは、なかなかできにくいと言わなければならない。

お互いに、「文化や習慣が違う」ということは、日本人留学生も、中国人学生も知識としては否定しないであろう。しかし、この事例 1 のように実際の行動や交際の中では、この知識がなんら機能しない、ということが多いと言えよう。否、まるで思いもつかないのが普通であろう。これには、実際にどう違うのかという体験や経験が必要で、それがないとこの知識は発動しないと言えるかもしれない。

しかし、まずは、相手を信頼することは、異文化交流の経験がそれほどない場合においても、有効でもあり欠かすことのできない視点である、と言えよう。

Ⅲ. 「違い」を乗り越えることをめぐって

次の事例 2 は、韓国に留学した日本人学生と韓国人学生が共同生活をしている「学生寮で起こったちょっとした事件」(斎藤, 2005: 55) の顛末が主題である。それは、「あること」が原因で「殴り合い寸前のケンカ」(同: 55) になったこと、だが結果的には「協定を結んで和解した」(同: 58-59) というものである。

「あること」というのは、「キミのものはどこまで (が) 私のもの? 私のものはどこまで (が) キミのもの?」(同: 57, ただし「が」は筆者の

補い) という「自己の《領域》に対する感覚」(同：55)の違いであり、自己の《領域》に関する「文化の違い」(同：59)である。

具体的に言えば、共同生活をしている韓国人学生であるパク君が、冷蔵庫にある日本人留学生山中君のものを食べてしまうことがこの事件の発端である。しかし、この「山中君のものを食べてしまう」ことはパク君にとっては、「ルームメイトの山中君という存在は、生活を共にしているという点において、「準家族」である。家族なら、…(中略)…「兄弟みたいなものだから、どっちが食べたっていいじゃないか」という程度のもので、他人の食べ物を盗ったという認識はまったくなかったはずだ。」(同：57)

一方、日本人留学生の山中君は、「一緒に住んでいる親しい友人であっても、他人は他人。家族という感覚では捉えられない。もし冷蔵庫にあるケーキを食べたいなら、「もらってもいい？」と聞くのが筋だ、という考え方がある。」(同：57)

さて、事例2は、このような違いをめぐって、どうして「殴り合い寸前のケンカ」になったのかに焦点を当てた叙述になっている。つまり、「文化や習慣の違い」は具体的にどのようなことであったか、そしてそれによってどのようなことが起きたか、ということが主題になっている。

しかし、異文化間の交流や接触において大事なことは、違いをどのように乗り越えるかということである。この事例では、二人が共に了解し合える行動の仕方を話し合ったことの方をむしろ取り上げるべきであろう⁴⁾。そして、そのような話し合いを進めるうえでどのようなことが必要かを考えることが大切である。そのような観点から、この事例とこの事例の扱い方(取り上げ方)について、考察しよう。

4) 『ことばと文化の日韓比較』の本文では、「違い」をどのように乗り越えたかが主題にはなっていない。

事例 2

学生寮でちょっとした事件が起こった。韓国に留学している山中君とルームメイトのパク君が、共有の冷蔵庫に入れておいたデザートのこと、殴り合い寸前のケンカをしたというのである。

事件の発端は、山中君が買ってきた小さなプリンだった。もっとお金があれば、パク君の分も買えたのだが、たまたま辞書を買った後だったのであまりお金がなく、自分の分だけプリンを買って冷蔵庫に入れておいた。翌日、試験も終わったので食べようとする、ゴミ箱に空の容器が捨ててあった。どうやらパク君が勝手に食べてしまったようだ。

何日かたって、山中君の母親から荷物が届いた。そこには山中君のすきなスナック菓子なども入っていた。湿気ないようにと冷蔵庫に入れておいた。すると、それも知らない間にパク君に食べられてしまった。

その後も山中君が冷蔵庫に入れるたびに、パク君がなんの断りもなく食べてしまう、という状態が続いた。業を煮やした山中君は、冷蔵庫にキープしてある食べ物や飲み物すべてに自分の名前を書いて、暗に抗議することにした。

すると、それに気がついたパク君が烈火のごとく怒ってこう言った。「どうして名前なんか書くの。一緒に住んでいるんだから、僕たちは家族も同然じゃなかったの?…」

(斎藤明美, 2005: 55-56. ただし、文章を簡潔にするため、字句を多少省略している。)

ところで、この二人の話し合いは次のような決着をみせたようだ。

その後、山中君とパク君は、「自分が買って来たからといって、わざわざ名前を書かない」「どっちが食べてもかまわないものについては、冷蔵庫にいれるとき「食べてもいいよ」と声をかける」「相手が買って来たものは、「食べてもいい?」と断ってから食べる」という協定を結んで和解したようだ。いまでは、ケンカしたことによって、互いの感覚の違い、文化の違いに気がついてよかったと、双方納得しているようである。

(同: 58-59)

1. この「ちょっとした事件」の原因はなんだろう

1-1. 事例2.を読んだ感想は

この叙述には、パク君の行動が次のように表現されている。「パク君が勝手に食べてしまったようだ」「知らない間にパク君に食べられてしまった」「パク君がなんの断りもなく食べてしまう」と。それに対して、山中君の行動と感情は次のように表現されている。「業を煮やした山中君は、冷蔵庫にキープしてある食べ物や飲み物すべてに自分の名前を書いて、暗に抗議することにした」と。

これを読んだ日本人学生の多くは、「ひとの物を食べる」なんてとんでもない、なんと自分勝手な、と思うだろう。一方、韓国の留学生はそれとは対照的に、戸惑ってしまうだろう。この話はパク君個人の問題で、韓国には「他人の物を勝手に食べてもいいという文化はない」し、「一緒に住んでいるから家族だという主張も理解できない」と思うことだろう。

事例1は、中国人学生の視点で日本人留学生の振る舞いを述べていた。この事例2は、日本人留学生の視点から、韓国人学生の振る舞いを述べたものである。どちらも自分の視点が優先して、自分に都合の良い叙述になっている。そして、どちらもやり方や考え方が違うことが、衝突や齟齬の原因であることを述べようとしている点で共通した叙述の形になっている。しかし、そもそものことの起こりは何なのかという観点がかならずしも明確ではないために、当事者の一方が不当に非難されているという印象を否めなくなっている。この点も事例1と同様である。

1-2. そもそもの「ことの起こり」は何だろう

さて、ではそもそものことの起こりは何であろうか。それは、先に述べた自己の領域感覚の違いであろうか。事例2の叙述の仕方は、この違いがそもそものことの起こりである、という考えに基づいてなされていると言えよう。

しかし、そもそものことの起こりは、やがてこの二人が話し合うことに

なったテーマそのものである。それは共同生活のやり方であったのであり、それがこの事例のそもそものテーマなのである。そして、二人がそれぞれに抱いていた共同生活の内実の違いが、そもそものことの起こりであり、その内実の違いが、自己の領域感覚の違いによって発現したのであった。それで、やがて二人は、共に了解し合える行動の仕方を話し合って、共同生活のお互いに共有できるやり方を決めることになったのである。

2. 共同生活をめぐって

2-1. この二人の関係は

この文章は、多くのことを省略している。この「ちょっとした事件」が起こるまでの、二人の関係はどうだったのか。山中君はこのことが起こるまでの二人の生活をどのように考えていたかについては、書かれていない。

それに対して、パク君が二人の関係を「家族同然」と見ていたと書かれてはいるが、だがどうしてそのように考えたかについては、全く書かれていない。

そのような背景に触れることなく、この出来事が山中君の視点で描かれていることは、この出来事の扱いを、不公平なものにしている。

しかし、その後双方がこのような出来事を通して交流していることからすれば、双方の見方・考え方を含め、二人の生活の全体をできるだけ考慮するようにしなければ、この出来事の取り上げ方自体に不公平が生じるだろう。

さて、二人がどんな関係であったのか、実際にどんな共同生活をしていたのかについては、この文章以外のところで、ただ、次のように述べられているだけである。「それまでは勉強のこともなにかと助け合い、休みには一緒に遊びに行っていたふたりだったのに、互いに「他人のものは食べるべきじゃない」「一緒に住んでいるのにそんな水くさい話があるか」と主張して譲らず、険悪な雰囲気になってしまった」(同：56)ののだと。

これによると、二人はただ一緒に住んでいたというだけではなく、親し

く交流していたことがわかる。これに加えて、パク君が「家族同然」と考えようとしていたことの背景としては、次のような、韓国の留学生の意見が参考になる⁵⁾。

「たぶんパク君が山中君を家族だと思える前には、二人がお互いの食べ物を一緒に食べたり、自分の物を分けて食べたと思います。そうするなかで、どんどん仲良くなって、もう山中君を家族も同然だと思ったパク君は、なにも気にかけることなく、山中君の物を食べたと思います。」

パク君の行動はパク君にとって自然なもので、その行動には納得できる理由があるという見方である。

事例2の文章だけからでは、あまりに理不尽にみえるパク君の行動だが、それなりの背景と理由があると考えることが大事である。それは、この出来事の原因をパク君という個人の問題にしない、ということである。つまり、性格の問題（わがまま、自分勝手、いじわるなど）とか、特別な考え方をしているとか、というふうには考えないということである⁶⁾。

このような衝突の原因を考えると、ともすれば私たちは個人の問題としがちである。しかし、原因を考えることは、個人の考えや感情の背景にある、習慣や文化をお互いに理解するきっかけである、と考えることが必要である。

そして、文化や習慣の違いを理解するためには、その違い（「自分のものの範囲の違い」）が発現した（「自分のものが食べられて驚き、いやがったこと」）そもそものことの起こりが何であったか（「共同生活をしていること」）を思い起す必要がある。つまりお互いが共通に関心を抱き目指していたこと（「共同生活をする事」）を、顕在化させることがなければならぬ。そもそものことの起こりの観点からすれば、それぞれのやり方、考え方、感じ方の違いがより明らかになるとともに、さらにそのような違

5) 2005年度韓国啓明大学交換留学生 金君の文章より

6) 相手は「善意の一般人」である。

いによって、いろいろな誤解や齟齬が生じたことがお互いに確認できれば、そのような違いにもかかわらず、お互いが目指し関心を抱いていたことは共通で同じであったことがさらに確認できるので、この違いをお互いに共有することができやすい、と言えるのではないだろうか。

2-2. なぜ「そもそものことの起こり」が見失われるのか

現に目の前で起こっている衝突や齟齬は、二人が目指し共に抱いていた関心を見失わせるからである。というのもこの衝突は、怒りや戸惑いや嫌悪といった感情とともにあり、これらの感情は「そもそものことの起こり(共同生活をする事)」を不可能にし、無効にし、それをできなくさせるからである。そのような感情とともにある出来事が、当面の関心の対象であるので、「そもそものことの起こり」を思い起すことさえなくなるように考えられる。

2-3. 共同生活について、二人はどう考えていたのだろう

2-1. で見たように、山中君とパク君は特に相性が悪いということもなく、問題なく共同で生活していた。どちらもともにこの共同生活が二人にとっていいものになるように願い、努めていたということができようであろう。

パク君は共同生活では、「ボクのはキミのもの、キミのはボクのもの」だよと、はっきりあらためて言っていなかったとしても、そのように理解していたし、そうするのが当たり前だと考えて、お互いに食べ物を一緒に食べたりしていたことだろう。

韓国での共同生活は、パク君が言うように、「家族も同然」であり、それは「キミのはボクのもの」「ボクのはキミのもの」と言われるように、共同で使ったり、食べたりすることであろう。しかし、山中君には、それが実際には理解できていなかった、と言えるだろう。

山中君は、パク君との共同生活において、パク君のもの(パク君が買った

ておいた食べ物)を無断で食べたことはないだろう。山中君にとってパク君のものは「ひとの物」だから、勝手に食べていいものではない。かならず本人の了解が必要だと思っていただろう。

2-4. 「共同生活の基本は、お互いの考えや感情を尊重し合うことだ」という考え方について

山中君は、そもそも共同生活についてどのように理解していただろうか。おそらく普通に、お互いが協調し合いながら、しかもその中でお互いの考えや感情を尊重し合うのが共同生活の基本だと考えていたに違いない。

そして、このことを、あらためて双方で話し合ったり確認し合ったりすることはないだろう。普段の行動がそのことを示していると考えられるだろう。だからたとえ話していなかったとしても、それは確認するまでもないこととして、そのように理解し、そのようにする(実践する)ことだと思っていただろうし、パク君もそう考えていると思っていただろう。

つまり、山中君はこのようなことを暗黙のうちに了解し合っていると考えていた、ことだろう。というのも、このような考えは、実際パク君にも異存がないと言えるだろうし、パク君もお互いの考えや感情を尊重することに異議をはさむことはないだろう、と考えられるからである。

2-5. 「ものに名前を書く」行為は、山中君にとってどんな行為か

多くの留学生は、山中君はなぜパク君にはっきり言わないのか、不思議がる。そして山中君がはっきり言わなかったことも、「ケンカ」の原因の一つだと言う。

どうして、山中君はパク君にはっきり言わなかったのだろうか。それは、共同生活の心得のようなもの(2-4.)は、お互いにとって自明のものであると山中君は考えていたから、と想像される。そしてそれに基づいた共同生活における山中君の行動が山中君の考えを表し、それを見てパク君も山中君の考えを理解してくれるだろうと考えていたからだと思われ。そ

して、山中君には、このような態度こそが、共同生活においてお互いを尊重することだと、思われていたと想像するのだからであろう。

山中君がパク君のものを食べないでいることについて、パク君はどう考えていたのだろうか。パク君はたまたまそうなっているに過ぎないと考えて、あまり気にもとめていなかったのではないと思われる。あるいは、おそらく、山中君がパク君のものを食べないのは、食べ物の好き嫌いの問題か、そのようにするのが好きではないという好みの問題だと思っていたかもしれない。いずれにしろそこに、山中君の行動の主義・主張があるとは思っていなかったに違いない。ましてや、「私がしてほしいことは相手に対してはしない」というメッセージが込められていたとは考えつかなかったに違いない。

そうこうしているうちに、山中君が、お互いに了解し合っていると想定していた、「お互いの考えや感情を尊重する」という思いは、山中君が考えるようには通じないものだ、ということが明らかになってくる。

山中君は、自分の行動を見て、何を考え何を望んでいるかを、パク君が理解し気づくことを期待したと思われる。この行動方式は、山中君にとっては、共同生活を始めて以来一貫していると言ってもいいだろう。

最初のうちは、それとなく気がついてくれることを期待したが、それが効果がないとわかるや、よりはっきり気づくことを期待して名前を書く行動に出たと言えよう。

2-6. なぜパク君は「烈火のごとく怒った」のか

ここで、見ておきたいことは、パク君が「烈火のごとく怒った」原因は何かである。山中君のこの行動をパク君の側から見ると、これまでお互いが合意し尊重してきた共同生活を、何の相談もなく、一方的に破壊しようとするものであり、それはパク君の行動を、突然何の前触れもなく拒否するものと見えるに違いない。

問題が山中君の側に生じているとき、山中君はそれをパク君に気づかせ

ることが必要だと思ったのだろう。パク君がそれに気づきさえすれば問題は解決すると考えたのだろう。

しかしながら、山中君が嫌がり困ると感じることは、パク君にはなんら問題になりえないことであり、気づきようのないことであった。だが、山中君には、そのような考えは全然浮かばなかったし、そのような考えを持ち合わせていなかった。それはパク君の側も同じで、彼にも山中君がそこまで困りはてているとは想像だにできなかったことであった。

二人は、お互いの考えや気持ちを尊重し合うことが共同生活では必要であることはわかっていた。そして共同生活の中身については、お互い了承し合っているとお互いに思っていた。ところが、その了解の中身は食い違っていた。そして、その違いが、山中君の名前を書く行為になり、そしてパク君のそれに対する驚きと怒りとして現れたのである。

3. 衝突や齟齬を乗り越えること

3-1. 感情にとらわれないこと

このような衝突や齟齬を乗り越えるためには、まず、感情にとらわれず、相手の意見に耳を傾けることであろう。もし、相手に対してなんらかの「共感」があれば、当面の感情にかかわらず、相手の言い分を聞こうということになりやすいであろう。もしなんらかの「共感」に類する感情がなければ、とらわれた感情から解き放たれることは実際上なかなかむずかしいだろう。

3-2. 配慮ということについて

この事例2を読んだ、韓国からの留学生は、次のような意見を抱くことが多い。パク君は山中君が外国人であることを考慮せず、一緒に住んでいるから家族だという考え方を押しつけている、それはよくない、と⁷⁾。

7) 2005年度韓国啓明大学交換留学生 鄭さんは、次のように書いている。

「一緒に住んでいるから家族、だからキミのものはボクのものというパク君のメ

留学生は、「文化や習慣の違い」を現に日本において明らかに感じ、日本人学生や日本人の普通のやり方にいろいろ戸惑いを感じている。日常的に、さまざまな「違い」に対応し、その都度自分のさまざまな感情と付き合うことが日常になっている留学生にとっては、「違う文化や習慣」を持つ人に、自分のやり方を押しつけることの無謀さが身に染みてわかっているのだから、パク君のやり方に批判的にならざるを得ないことは、理解できる。

ところで、もし、「文化や習慣が違う」人に対するなんらかの「配慮」ということがあるとすれば、それは、こうした「違い」を乗り越えようとする意志、あるいは「そもそものことの起こり」を見失うまいとする意志の形で表れると言えるのではないだろうか。そして、もしこうした配慮が相手に対する「共感」に基づいたものであれば、この「違い」を乗り越えることに大変有効であるし、実際に効力を発揮するであろう。

3-3. なぜ話し合うことをしなかったのか

ところで、「事件」が起きたとき、彼らはそれが「共同生活」のやり方をめぐむ問題だという、意識・認識を持たなかったのは、なぜであろうか。

それは 2-2. でも述べたことではあるが、まずどうしても目先の出来事にとらわれ、感情的になっているからである。そして、この出来事は二人が目指していた、あるいは共に関心を抱いていた共同の生活の中で生じ、共同の生活の破壊に向かうものであった。あるいは、共同の生活を不可能にするものであった。さらに言えば、この対立（「ケンカ」と言われている）は目指されていたものが破壊されたこと、その意味が失われたことを表している。だから、どうしてもそのことの解決が先決になるのである。それが、「事件」そのものの位置付けと、その意味に気づかせない原因である。つまり、もう一度目指されていたことに立ち返るということを忘れさせる

▽ 考えは韓国人の一般的な考えではなくてパク君本人のわがままです。なお山中君は外国人です。パク君は自分とは違う考えを持っているはずの外国人をもっと配慮しなければならなかったです。」

のである。

それにしても、二人は、「文化や習慣が違う」者どうしが共同生活を営めば、いろいろ問題が生じるだろうという予想を持たなかった、そういう警戒がなさすぎた、そのように思われるのだが、それはなぜだろうか。

恐らく、このような予想や考えを持たないことはないと思われるが、それは具体的な対策として機能するということではなく、先の配慮（3-2.）で述べたように、違いを乗り越えようとする意志として機能するということではないだろうか。

しかしもし、当事者がお互いの習慣ややり方にこだわれば、対立を乗り越えることはできないであろう。お互いの関心を今一度確認して、そのためにどのようにすることができるかを話し合うことができれば、この対立を乗り越えることができる。そしてそのとき、この対立がお互いのやり方の違いであることが分かり、それによってお互いのやり方に対する理解が深まると言えるのである。

3-4. 二人の協議とその結果について

この出来事は共同の生活を不可能にするものであり、共同生活の意味を失わせるものであった。しかし、二人はこのような共同生活の危機を乗り越えた。出来事に見られる対立は深いが、しかしそれは二人の共同生活の意義を失わせるものではなかったからである。言い換えれば、二人の共同生活によせる熱意がこの対立にまさっていたということであろう。そのことからすれば、二人には配慮（「違い」を乗り越えようとする意志）がうかがえるし、さらにある種の「共感」もあったと言っているのではないだろうか。それらが粘り強い話し合いを可能にしたと言えよう。そして、この点でこの二人の人間性が高く評価できると思う。

そこで、彼らは実際に、改めて共同生活のやり方を話し合った、その観点はまさに、どのようなやり方をしたら、お互いの考えや感情を最大限尊重できるか、ということを目指して、どこまでそれぞれが妥協できるかを

探ることであった。

山中君は、納得がいかない点をしっかり説明しなければならない。しっかり説明しなければ、伝わらないのだということに気づかなければならない。山中君が説明して始めて、パク君は山中君が嫌がっていることを知ることができる。

しかし、それはパク君の考える共同生活を否定する内容を含んでいる。パク君にとっての共同生活とはお互いのもの（例えば、食べ物など）を共有することを意味し、それを嫌がるのなら、ただ住む場所が一緒というだけで、共同して生活しているとは言えないからである。

お互いが、お互いの気持ちや考えを尊重し合って生活することを実現するためには、困っていることを解決しなければならない。それを解決するためには、自分の価値観や生活習慣に固執して、相手に要求するのではなくて、お互いが、どこで折り合えるか、どの点まで許容しうるか、を粘り強く話し合う必要がある。

このような行き違いは、感情をともなっているだけに、足して二で割るようにさっぱりと合理的に解決されるものではない。粘り強い話し合いで、お互いを知ることしかない。それができれば、二人の信頼をさらに深め、これをきっかけにそれ以後色々な問題が心置きなく話し合える仲になることもある。また、粘り強く話し合っても、お互いにすっきりせずなんとなく妥協することもあるし、話し合ってはみたものの、なかなかうまくいかないことも、もちろんある。

どのような結果になったとしても、生活習慣を変えたり、価値観と対立するものを認めることは、なかなか難しいということを理解するだろう。それはかけがえのない経験であり、「文化や習慣が違う人」に対する対応を考えさせるだろう。そして「文化や習慣が違う人」を一方向的に責めることは無理があり、そもそも全体的外れであることを気づかせるだろう。

彼らが話し合った決着は、どちらかが一方のやり方を受け入れた、ということでもないし、「郷に入れば郷に従え」というように、その国のやり方を一方的に迫ったというものでもない。それぞれがそれでいいと思える内容を探して話し合ったことが認められる。それぞれが「してほしいこと」がよりはっきりとお互いに分かり合えたであろうと想像される。その点が大変よかったと評価される。

IV. 二つの文化を肯定することについて

1. 「統合 (integration)」という態度

さて、これまで二つの事例をもちいて、異文化間の接触の中で生じた出来事を、どのように解釈し、取り扱うべきか、そして、「文化や習慣の違い」を克服するとはどのようなことか、について考察してきた。

これらの事例の当事者の一方は、どちらの事例でも「留学生」であったが、彼らは、相手国のやり方や考え方とは違う、自分たちの文化や習慣を持っている。彼らにとって、「文化や習慣の違い」を克服することは、これら二つの文化や習慣に対してどのような態度をとり、相手方のやり方や考え方をどのように受け入れるかという課題でもある。

このような課題を考察するにあたって、ベリー (J. W. Berry) が、文化変容 (acculturation) のありかたを分析するために提唱した文化変容態度 (acculturation attitudes) 概念を参考にしよう (Berry, 1990)。ベリーは文化変容態度として、四つの態度をあげているが、それらは、「二つの問題 (issue)」のそれぞれに対して、肯定・否定 (yes, no) のどちらの態度をとるかによって四分類されている。この「二つの問題」の一方は、「自分の国や社会の文化的アイデンティティとその特徴を維持することに価値があると考えるか？」であり、他方は「他の文化・社会集団との関係を維持することに価値があると考えるか？」である。そして、この両方を肯定する態度を「統合 (integration)」と名づけている (同：244-245)。

ところで、ベリーは、この文化変容を集団レベル (population level) と

個人レベル (individual level) に分類しているが、その理由を二つあげている。一つは、それぞれのレベルで変化の現象 (phenomena) が異なること、もう一つは、文化変容するグループに属するすべての個人が、同じような仕方、同じ程度に必ずしも文化変容するわけではないことを指摘している (同: 233-234)。

ここでも、個人レベルでの文化変容について論じようとしているのであるが、その個人レベルでの文化変容は、「個人レベルでは、もろもろの変化はアイデンティティ、価値観、態度のような現象においてある」(同: 234) と述べている。

先にあげた「統合」は、異文化の中での、アイデンティティや価値観やいろいろな態度に現れる、自己のあり方に関する変化である。

しかも、この態度は「二つの問題」の質問に対して、それらを肯定しているあるいは肯定しようとする、自己の選択であり、自己にとって他なるものをも肯定しようとする積極的な態度である。

2. 「自己の成長とユニークさ」という理解

さて、ではこの「統合」という態度は、どのようなこととして、意識されているであろうか。

「統合」という心理的文化変容⁸⁾の態度にある「自己」を、文化的変容以前の「自己」と比べて、その違いに戸惑い、新たな自己をどのようなことと理解し納得するか、ということに関して、以下に、留学生 (周さん) の場合⁹⁾ を例に考察する。

8) これはベリーの用語で、「心理的」というのは「個人レベル」での文化変容であることを意味している。

9) 周密「私の中の日本人化」広島キワニスクラブ留学生日本語作文 第14回1999年所収 この作文では「附産物」という表現が使われているが、ここでは「副産物」という表現にしている。

周さんは、日本の社会になじんで、その結果新たに経験する問題について書いている。日本人と中国人とを区別して話すことがなくなった、気持ちの面でも日本人と近い感覚になっていると。そのように日本の社会環境に適応してきた結果、「日本人化」ということが気になりだしたというのだ。そのような状態をどのように自分で理解したらいいのか、ということ述べている。

「(以上のように、) 私が表面的に日本社会という環境に適応してきたことの副産物は、自分の内面的な日本人化であった。このことを意識してから、私の心の中で葛藤が続いた。」

「私個人の角度から見ても、自分が中国人であるというアイデンティティを持っていると思っていた。そのアイデンティティは日本人化につれて薄れていき、いずれ自分という人間の存在と位置付けが分からなくなってしまふという不安が大きかった。」

私たち日本人の側から言えば、日本社会に十分適応していることは大変結構なことで、何も問題ないと思うのだが、周さんはそれが結構なことだとは考えない。日本社会に適応することは、自分のアイデンティティを失うことになるのか、と自問し、それらが相互に矛盾しない、納得できる自己理解を求めている。

確かに、このような経験は何も周さんに限ったことではない。周さんと同じく中国から来た留学生から、同じような感想を聞くことが度々ある。ある留学生は¹⁰⁾、こう言っている。

「日本に長くいるから、私も自分が気づいていないところで、日本人になっているとよく言われるようになった。が、言われる度に、私はほんの少し黙りこむ。確かに、『郷に入っては郷に従え』だが、やっぱり自分は中国人なので、中国人として認めてほしいし、中国のいい所を日本で多くの人々に伝えたいと思う」と。

10) 2000年度教養ゼミナールB (日本の文化・歴史・諸制度ゼミナール) 01に参加していた 劉さんの文章より

周さんにおいても、日本社会にうまく適応することと、他方で「自分の文化的アイデンティティとその特徴を維持することに価値を認めること」の両方を積極的に肯定しようとする自分をどのように理解するかが、問題になったというのである。

「自分を変えることを漠然といけないことだと思っていた。しかし、その変化もまた自分の成長であり、自分のユニーク性につながる。つまり、私は中国人か日本人かにこだわる必要がなく、国際人という視点を持つことも自分のアイデンティティだと思う。」

日本の環境に適応してきたということは、「日本人化」と考えるべきことではなく、「それは自分の成長であり、自分のユニーク性だ」と理解できる。周さんが、自分で私はこのように「日本人化」しましたと言っているわけではなく、「日本人化」と思われ、そう見えることは、実は「自分の成長」なんだと言っているのである。そして、中国人であると同時に、「国際的な視点を持つことができる自分」、そういう自分が「自分である」と言うわけである。

これは実は大変大きな成長であると言えるのではないだろうか。周さんは二つの文化をうまく生きることができている、ということに他ならないのであり、そういう意味では、「国際的な視点」を持つことができていると言ってもいいのではないだろうか。

3. 一様ではない (uneven) ということ¹¹⁾

ベリーの言う「二つの問題」を肯定することは、自分の成長であり、ユ

11) 「一様ではない」ということは、文化変容の二つの側面について言われる。一つは、同じ集団に属している各個人について、変容の仕方は一様ではない、「同一の仕方 (uniform manner) で影響されるのではない」(Berry, 1990: 240) ということである。もう一つは、同じ個人においても一様ではないということであり、この点についてここでは論じている。

ニークさであると自覚されている。ところで、注意したいのは、そのように自覚されていることを、現実の行動において、一様な対応が行われることと理解すべきではない、ということである。言い換えれば、「統合」というあり方は固定的に考えるべき事柄ではない、ということである。先の例でも分かるように、「統合」という態度は、一方でその社会にうまく適応できているが、他方で「やっぱり自分は中国人なので、中国人として認めてほしい」という主張を含んでいる。

オバーク (K. Oberg) は、カルチャーショックの状態から回復して、その社会に適応できていることについて、次のように述べていた。「(訪問者 visitor にとって) 人々のやり方を理解することは本質的 (essential) であるが、しかしこれは、訪問者自身のやり方をあきらめるべきだということを意味しない。実際に生じることは、訪問者は二つの行動方式を発達させたということである。」(Oberg, 1960: 182)

ベリーの言う「二つの問題」を肯定することは、オバークの表現では「二つの行動方式を発達させた」ことを意味する。

つまり、「統合」という態度は、この「二つの問題」を肯定しようとする志向はありつつも、現実にはいろいろな出来事に応じて、いろいろな対応がありうることを意味しているのである。というのも、「二つの問題」の肯定は、二つを統一するというのではなく、現実の出来事に対していつも同じ態度があるということではないからである。

ベリーも、「統合」という文化変容態度を説明しているところで、次のように述べている。「文化変容は、行動と社会生活の領域にわたって“一様ではない (uneven)” ことに注意すべきだ、たとえば人は (仕事において) 経済的同化を求め、(パイリングという方法で) 言語的統合を求め、(同族結婚によって) 婚姻的分離を求めることもある。」(Berry, 1990: 245)

「二つの問題」のどちらをも肯定するということは、現実の出来事に対して、どちらかの方により多く軸足が傾くということが起こりうるということである。だから、ある場合には、なんらの抵抗や障害を感じることの

ない肯定的な対応となることもあるし、ある場合には、批判的で否定的な対応になることもあるということである。

二つの文化を肯定し、その社会に適応できていることは「自分の成長でありユニークさ」であると自認することと、場合によっては、その社会に対して批判的であることとは、決してあい対立することではない。また、その社会に対する批判がかえって、その社会に対する積極的な関与である場合もありうるのである。

4. より大きな社会に属する私たちの対応

さて、では「文化や習慣が違う」人を受け入れる側は、どのようなことに注意すべきであろうか。

私たちは、日本の社会に適応できていればいるほど、ますます日本人と変わらない対応をし、日本人と同じように振る舞うことを知らず知らずのうちに要求しがちであるが、そのことにほとんど気づかない。

「はじめに」で紹介したウゲットさんは、次のように述べていた。「日本に住んでいるからといって、日本人になったわけではありません。私はフランス人だし、それを誇りに思っています。私は日本人からいろいろと学ぶし、日本人も外国人から学ぶ姿勢を持つべきです。」(ムハマド・ズベル, 1990: 224)

「統合」の態度にある人は、その社会の人々と友好に交流・接触することの意義と価値と必要性を十分に認識している一方で、自分たちの文化や習慣を持ち続けている人たちであることを知っておくことが必要である。

ともすると私たちはこのことにまったく気づかないか、忘れがちである。もし私たちが「文化や習慣の違い」人たちとの交流に意義と価値と必要性とを認めるのであれば、私たちもまた、一方で「文化や習慣の違い」人たちとの交流を肯定し、他方で自分自身の文化や習慣の価値を認める態度をとるわけで、彼らと対照的ではあるが、同じ意識構造にあることが確認されよう。

そして、友好的な関係を保つことを目指しながら、時によって、その関係を脅かす（壊しかねない）出来事が生じた場合、お互いがお互いの軸足をそれぞれ自分の価値観や見方に移すと、対立が生じ険悪な状況になるだろう。その場合には、私たちはⅢ節で見たように、「違い」を乗り越える試みを始めることになる。

ところで、この小論では個人を「善意の一般人」という相のもとで述べてきた。だが現実にはさまざまな個人が存在し、先の対立をより多様で複雑なものにしている。

そして、ともに「統合」の態度をとる者どうしの間での対立や行き違いや衝突は、どの社会にもある個人間のそれとみなせると思うが、軸足がより自分の文化や習慣の方へ傾けば傾くほど、「文化や習慣の違い」による対立や行き違いとして意識されやすいと言えよう。

また、相手国の人に対して友好の対応をとろうとしても、相手が各種の偏見にとらわれていれば、いかに友好的な関係を求めても、報われないこともある。このような場合も、これも個人間の問題であるが、「文化や習慣の違い」「民族の違い」としてみなされる傾向が強いと言える。

このように「文化や習慣の違い」は、さまざまなレベルで、さまざまな状況で、さまざまな意味合いで言われる。しかし、小論では、その「違い」を乗り越えて、お互いの交流を可能にする見方、考え方を特に取り上げて論じてきた。多くの留学生と、彼らと接する多くの日本人が、より友好的でみのある交流ができることを願っている。

参 考 文 献

- Berry, J. W., 1990. "Psychology of Acculturation." In Brislin, R. W. (ed.), *Applied Cross-cultural Psychology*: 244-245. Newbury Park, CA: Sage.
- Berry, J. W. "Acculturation and Adaptation in a New Society" *International Migra-*

tion, 30, 69–85.

- J. S. Phinny, J. W. Berry, P. Vedder, and K. Liebkind, 2006. “The Acculturation Experience: Attitudes, Identities and Behaviors of Immigrant Youth” In J. W. Berry, J. S. Phinney, D. L. Sam, P. Vedder (eds.), *IMMIGRANT YOUTH IN CULTURAL TRANSITION*: 71–116. LEA London.
- Oberg, K., 1960. “Cultural Shock: Adjustment to New Cultural Environments” *Practical Anthropology*, 7, 177–182.
- 吉 洪著『日中比較による異文化適応の実際』溪水社 2003
- 小柳志津『アジア系留学生に見る境界意識』異文化間教育22, 2005: 80–94
- 斎藤明美著『ことばと文化の日韓比較』世界思想社 2005
- 末本美樹著『日本人留学生のアイデンティティ変容』大阪大学出版会 2006
- 田中共子著『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版 2000
- ムハンマド・ズベル著『隣の外国人』同文書院 1999年
- 横田雅弘・白土悟著『留学生アドバイジング』ナカニシヤ出版 2004
- 陸慶和著 澤谷敏行他訳『こんな中国人 こんな日本人』関西学院大学出版会 2001

Summary

An analysis of overcoming “differences among cultures” in intercultural exchanges and/or contacts

Keiji NISHIMOTO

In various cases, “differences among cultures” seem to be obstacles to intercultural exchanges. And it is also difficult to explain systematically methods to overcome those obstacles.

In this paper, I propose two conditions required for actualizing an intercultural exchange.

One is that, we need to mutually consider other persons as “well-meaning people”. We tend to criticize their characters, when confrontations,

disagreements and misunderstandings happen between us and them. In these cases, to regard them as well-meaning people is instrumental in preventing us from criticizing them.

The second condition is to keep an intention or a will to maintain a friendly exchange. Confrontations and misunderstandings in an exchange are inclined to become causes to make it impossible to maintain an exchange itself.

So we need not to lose an initial purpose which is to make a friendly relationship. And to keep this intention makes us patient in an exchange.

Paying attention to observing these two conditions, we can cultivate a better understanding between us and people with cultural differences.

In addition, I propose another inevitable point, that is, the necessity of understanding those people who have already adapted to our society.

They have interest in maintaining both their original culture and daily interactions with others. They have developed two patterns of behavior.

So, we have to think that we also need to develop two patterns of behavior in keeping with our intention, our will, to interact with them and maintain a friendly exchange.